

センバツ開幕

天国の母に、まず1勝

5回、この日の本塁となる安打を放った八学光星の長野宏紀(19日、甲子園)



尚美さんの遺影を掲げ、長野宏紀に声援を送る応援団

長野(光星)魂の3安打放つ

ひたむきなプレーが聖地甲子園で輝いた。背番号6の背力を強く押し出したのは、まさにもなく天国にいる母だった。「高校に行ってから、もう一回、甲子園に出られたらいいね」。晴れ舞台を見届けるところもなく旅立った母にささげる魂の3安打。激闘のセン

バツ1回戦を制した八戸学院光星の長野宏紀(19)は汗を拭い、晴れやかに言った。「お母さんは喜んでくれたかな」。

大阪市に生まれた長野は小学1年の時に野球を始めた。以降、中学まで献身的に支えてくれたのが母尚美さんだった。自宅から1時間ほどかか

き来たか分からない。母は嫌な顔一つしなかった。試合の日ともなればカメラを手に、人一倍大きな声で応援。長野の記憶には、中学2年の時に甲子園で行われた硬式野球大会の思い出が焼き付く。「もう一回、甲子園に」。試合後交わした約束を果たすために、母の喜ぶ顔を見たい。そう信じて野球道にまい進した。

別れは突然だった。光星に入学してほどなく、尚美さんは病気で他界。50歳の若さだった。

悲しみを振り払うようにグラウンドでは必死にバットを振った。守備を磨くため懸命に白球を追った。結果を残すことが母への恩返しになる。そう信じて野球道にまい進した。

一塁側アルプスには尚美さんの遺影を持った応援団の姿も。長野の弟文哉さん(15)と一緒に観戦した父雅美さん(53)は息子の活躍ぶりに「うれしかった。誇りに思う」と目を細めた。

延長10回タイブレークを制し、早くも次戦を見据える長野。「周りの人たちからも『お母さんの分まで頑張らや』と言われてる。一つでも多く勝って、お母さんにいいところを見せたい」。天国の母に最高の結果を届ける戦いは始まったばかりだ。

(千葉達也)